

世界を唸らせる

日本の技法・素材

はるか昔に制作された美術作品の中には、今も描かれた当時に近い美しさのままに鑑賞できるものも多い。良好な保管状況や的確な修復作業などと並んで、それを可能にしている要因の一つは、長い時間を経ても劣化することの少ない画材がそれらの作品に使用されていることではないだろうか。ここでは、多種多様な素材のうち、特に日本で作られてきたものに着目し、その現状や今後について紹介していきたい。

作

品をつくるアーティスト側はともかく、美術作品を鑑賞する側で、そこに使われている素材や技法について詳しく知っている人は少ないだろう。しかし、そうした知識を身につけることで、作品をより深く知ることができるのだ。京都芸術大学（2020年4月に京都造形芸術大学から名称変更）大学院の担当教授で、画家・技法研究家の青木芳昭は次のように語っている。「作品が生まれ出たプロセスを、素材レベルまで遡り、作品を作り上げつつあった作家に憑依する^{ひょうい}ほどになって、細部にわたって追体験できる」。

実は近年、世界の美術界で素材・技法に関する重要性が増している。ニューヨークのグッゲンハイム美術館を皮切りに、各国の美術館が、この先100年間担保することのできる素材・技法で作られた作品以外は、コレクションに加えたいと宣言したからだ。その方向性は、これから收藏される作品だけに留まらない。すでに收藏されているものでも、

絵具が剥落したり、著しく退色したりしたという理由で、コレクションから外されあるいは返品されるという事態が起きている。アメリカや中国のアーティストや画材店は、いち早くこの問題に対応。ハンドメイドで小ロット生産される絵具や顔料を取り揃えるようになった。特に北京では、今や「Old Holland（オールド・オランダ）」の売上世界一を誇る画材店「MARKEDA（麥克美迪画材）」が、その「Old Holland」や「Williamsburg（ウイリアムズバーグ）」といった世界最高水準の絵具メーカーの製品をフルラインナップで扱っている。また、中国の著名アーティストたちは、従来のチューブ絵具を使う一方で、ガロン（約4リットル）単位で大量に購入した顔料とアクリル樹脂などのメデイウム（溶剤）を自らが配合した、オリジナルの絵具を駆使して創作活動をおこなっているのだ。美しい色で、発色がよく、100年後も劣化することのないこうした絵具こそが、今まさに求められているものと言えらるだろう。

世界のアートマーケットで取り扱われる作品は、現在、アメリカでつくられたものが最も多く、以下中国、イギリスと続く。しかも、その3カ国で全体の約9割を占めているのだ。一方、日本の作品は、わずか1%にも満たない。その一つの理由として、素材・技法が挙げられるかもしれない。もはや欧米では、「素材そのものがコンセプトになる」という考え方が美術界の主流となっている。だからこそ、前述したように自らが顔料やメデイウムを配合して絵具をつくるアーティストが出てきたのだ。

これから世界に挑戦しようとする日本のアーティストは、素材・技法についての理解を深めなければならぬ。自分の表現にあった画材を選択し、時には自らの手で画材をつくるという必要さえもが生じるだろう。そうした作品が増えてくれば、美術ファンも素材・技法のことを知るに越したことはない。そうした知識は、新しく生まれる作品だけでなく、昔の名作の理解も助けてくれるのだから。